

熱雷ねつらい

下校の一步目で私は躓つまずいて、夏の雨に濡れた。

母は玄関まで来ると私に無言でタオルを差し出す。ありがとう、この気遣いとお礼が、今の私たちの限界だった。

リビングを避けて、自分の部屋へと階段を上る時、雷が鳴った。雷は、この家には音がないことを私に教えてくれた。

机の上に封筒が置いてある。裏を見ると、それは父の妹、叔母からだった。不思議だ、今の私は父の死に関する内容を期待している。

私は部屋を見渡すけれど、濡れた体を預けられる場所が見つからなくて、立ち尽くすままに、封筒の糊を剥がした。丁寧な薄桃色の和紙に、叔母さんの丁寧な文字。けれど、所々でインクは滲しみんでいた――

お父さんのお葬式、お疲れ様でした。

元気になっていますか。お母さんも含め、少しは前向きになれましたか。

さっき、スイカを買って、食べました。子どもの頃に、あなたのお父さんとどちらがスイカのタネを遠くへと飛ばせるか、よく競っていたのを思い出したので、試してみたのだけれど、私はやはりまだまだでした。

そんなことは、よいですね。

この手紙は、あなたへの謝罪の手紙です。

お葬式の帰り道、一度も泣かなかったあなたは「これからどうしょ」と呟つぶやきました。横に並ぶ私が「やりたいことはあるの」と訊くと、あなたは長く黙ってから、「なんもない」と絞り出しました。

あの立ち止まるべき時間に、私は軽率にこれからの話をしてしまった。肩を抱いてあげることができず、感情に寄り添ってあげることもできなかった。本当にごめんなさい。

それからの私は、「あなたはこれからどうするべきか」をずっと考えていて、先ほどやっと、私なりの答えが見つかりました。なのでこの手紙で伝えさせてください。

私は、あなたに、文字を書いて欲しいです。

私が一人暮らしの片隅で、小説を書いていることは知っていますね。私には、明確に書いている理由があるのだけれど、そのことを家族に明かすことはできませんでした。

隠す相手がいなくなり、秘密は行き場を失っています。なので少し明かさせてください。

家族の皆は早くに、そして急に亡くなったけれど、私の人生に特別なことは何一つ、起こりはありませんでした。けれど、（もしくは「だから」なのかもしれない）私はずっと、苦しさで悲しさばかりを溜め込んでいました。

そんな私に十年ほど前、運命を変える出会いがありました。それは一冊の小説でした。その小説は、命を削って書かれたと言うべきものであり、血がほと走るような文章で人々の苦しみに寄り添っていました。集中の切れ間に、ふと顔を上げると、私は少し前までの自分に驚きました。文字を追っている時の私は定かで、確かに、生きられていたんです。

私はそのことに気がつくとすぐに、文字にして全てを吐き出したい衝動に駆られました。それから、意識を失ったように書いて、手が上手く動かないことで意識を取り戻すと、今まで溜まっていたものは文字となって目の前にありました。

私はその時、しみじみと思いました。祈りを持った真剣な言葉が、誰かを救うのなら、それは同時に、書き手自身は誰かを救えたことによって、自分の人生や過去に意味を持たせることができる。そうして、私は小説に憧れを抱くようになりました。

なので、泣くこと、怒ること、誰かへ話すこと、それらだけが自分と向き合う方法ではありません。一人だけの、安全な場所で、自由に文字を書いてみてください。もちろん、落ち着いて、吐き出したくなった時にね。

何だか、勢いに任せて書き終わった私は今、夏休みの宿題を思い出しています。

多分、あのうだるような暑さの中で、焦って書く文字は、溜め込んだ感情が湧き出て、文字になることと、どこか似ています。止めどなく湧き出る感情に興奮が混ざっている感じです。私は宿題を溜め込むタイプでしたが、兄は憎くも、計画的に終わらせるタイプでした。そんなことを最後にお伝えしてみます。

では、また。お元気で。

濡れて体は冷えていても、私は体の底から暑かった。

部屋の中を掻き回してみるけれど、相応しい紙はここにはなくて、部屋を出た。

まだ息遣いの残る父の部屋、扉は開いていた。私は入ってみる。

父の日記が、暮れゆく陽に照らされていた。うん。それが良い。私はそこに書きたい。